

博士學位論文要約

論文題目： 森鷗外の〈創作的批評〉
——大逆事件前後・〈国家〉と〈社会主義〉をめぐる対話篇——
氏名： 坂崎 恭平

要約：

本稿は、明治四〇年代、特に大逆事件（明治四三年）の前後に発表された森鷗外の文学作品について、〈国家〉と〈社会主義〉をキーワードとしつつ、歴史社会的な観点から考察を加えることを目的としたものである。紆余曲折の末四二年に文壇に復帰した鷗外は、翌四三年に起きた大逆事件と、それに伴う苛烈な言論・思想統制という「時代閉塞の現状」（啄木）のなかで、文筆をもって、国家の諸問題を取り上げていくこととなる。時の統治権力による検閲・発禁、社会主義者・資本家・国家の三つ巴の争いとなった工場法案、社会主義・無政府主義やそれに伴う〈新しい女／婦人〉といった新思想、それらに対する保守反動としての国民道徳論や家族、一種の歴史修正主義としての南北朝正閏論争など、当時の論壇・文壇において重要なトピックとなったさまざまな社会の諸事象を取り上げ、彼はそれらを文学作品のモチーフとしていく。そうした社会批評的な諸作品は、同時代の文壇において、〈創作的批評〉といった名で呼ばれていくこととなる。小説や対話文といった形式で現実の諸問題を取り上げるという、一見迂遠とも思える鷗外のこの試みについて、作家に関するものを含め、同時代の資料を掘り下げていくことで、歴史的な文脈を復元しつつ、その批評性の所在について論じた。

本稿が〈創作的批評〉と呼ぶ作品群を論じたものとしては、渡辺善雄『鷗外・闘う啓蒙家』（新典社、二〇〇七・二）が高度な達成を示しており、本論も同書に多くを負っている。渡辺は題名の通り、社会の諸問題を批評する鷗外について、「闘う啓蒙家」という像を提示した。同書でなされる資料調査、およびそれを通じてなされる作品の解釈は、きわめて妥当なものであり、こうした作家像は正鵠を射ている。しかし一方で、作家をやや神格化しているきらいがあり、作家像ありきの読解であると感じられる部分も少なくはない。そのうえで、同書の達成に付け加えるべきものがあるとするれば、それは、作品の可能性の裏にひそむ、限界や不可能性といったものについての考察であると思われる。本論もまた、作品の新たな批評の可能性を追究するものであるが、同時に限界や不可能性といった側面を捉えることで、作家像を過度に志向せず、その時代の歴史的な制約のなかでの作品ごとの射程というものを、可能な限り正しく計測することを試みた。

本論は序章・終章を含む全一〇章から成る。基本的には作品の発表順に論じたが、作品内容などに鑑みて、一部時系列に沿っていないところがある。序章では、先行論の概観と問題提起、および各章の要旨に加え、論の補助となる同時代の略年表を附した。各章の要旨は以下の通りである。

第一章では、鷗外の作風が明確に社会批評的なものへと切り替わる転換点となった作品

である、「フラスチエス」(『三田文学』明治四三・九)という対話文を取り上げた。作品読解に先がけて、この頃から鷗外の批評的な作品が同時代評での論争的なやり取りのなかで〈創作的批評〉と呼ばれていく経緯を、まず確認した。またそこでの、文学作品の形式／内容といった議論が、「フラスチエス」の主題である、検閲によって発禁となる書物の基準、という文脈とも関わりうるものであることを指摘し、本作の矛先が——従来見立てられてきたような——単に統治権力のみに向けられているのではなく、検閲・発禁に抗する文壇側にも、警鐘のようなかたちで差し向けられている、という読解を行った。

第二章では、小説「沈黙の塔」(『三田文学』明治四三・一一)・「食堂」(『三田文学』明治四三・一二)について、作中の固有名詞や、社会主義思想など広義の〈新思想〉に関する挿話に着目して論じた。まず「沈黙の塔」論では、日本の言論空間がゾロアスター教を信奉する「パアシイ族」の内部抗争へと置き換えられていることの意義や暴力性、また朝日新聞に連載された「危険なる洋書」という新思想に対する批判的な論説が、作中において一種誇張・デフォルメされていることと、その効用について論じた。「食堂」論では、海外の無政府主義者に関する挿話について、それが当時のメディア空間においてどの程度の情動的価値があったのかについてまず確認した後、そうした挿話について、登場人物の台詞のなかで、「(1862)」といった、小説表現としては破格とも言える年代の付加といった工夫をこらしていることの意義・作用を論じた。両作における挿話の多用は、物語の筋を運ぶ補助輪ではなく、それ自体が一つの主題として成立しており、〈創作的批評〉の次なる展開／転回であると結論づけた。

第三章では、対話文「ロビンソン・クルソー」(高橋五郎・加藤教栄訳『漂流物語 ロビンソン・クルソー』富田文陽堂、明治四四・五)について、同時期に発足し、鷗外が参加していた文部省文芸委員会を補助線としつつ論じた。作中で「客」という保守的な人物が〈ロビンソン・クルソー〉を危険視するという設定をふまえ、まず同時代の〈ロビンソン・クルソー〉受容について確認した。それをふまえたうえで、客と訳者の対立に主人が割って入るという本作の構図を、文芸委員会が、内務省によって発禁になった書物の復権・再評価を試みることで、国家と文学の対立を止揚しようとしていたという出来事と重ね合わせて見ることで、創作と実活動の両輪でもって鷗外が事に当たっていたさまを跡づけた。また、訳者に序文を請われるも、「駄目ですね。君自分でけふの会話をでも書いたらどうですか」と主人が断るという結末は、「私一個の思うところではなく、この会話を書け、という、現実において鷗外がまさにこの対話文を序文として寄せていることに対する自己言及的・パロディ的な記述であり、彼が対話篇＝ダイアローグに可能性を見出すさまが見て取れる。これについては終章にて再度取り上げた。

第四章では、労働問題を枕とした小説「里芋の芽と不動の目」(『スバル』明治四三・二)について、同時期に鷗外が属していた内務省中央衛生会、およびそこで議論されていた工場法(明治四四年公布、大正五年施行)案との関わりから論じた。本作を論じるうえで、鷗外が工場法案に関わっていたという伝記的な事実は、従来しばしば参照されてきたが、工場法と本作との関係については、抽象的な説明しかなされてこなかった。それをふまえて本稿では、工場法をめぐる言説を渉猟することでその接点の在処を探り、改めて本作の批評性を開示することを試みた。本作の主人公であり、工場主である増田は、生粋の江戸

っ子であり、「金はいらない」といった言辞から、従来利他的な人物として論じられてきた。しかし一方で、彼の工場が賃金問題で新聞から攻撃された、という記述から本作は始まっており、その後に彼の威勢のいい発言が生じることに鑑みれば、彼を単純に利他的な人物として断ずることは出来ない。工場法をめぐる、増田と同じ資本家の言を渉猟すれば、彼らは、「上は下を憐れみ下は上を敬ふ」「相敬愛するの観念」という、工場労働の実態とはほど遠い美辞麗句でもって、法案に断固反対していた。資本家のこうした二枚舌めいたやり口は、竹を割ったような増田の思想とは、一見するとほど遠いように思われる。しかし増田は、自身が口にする言葉の一方で、内心では江戸／秩父（彼がかつて疎開していた地）といった序列意識を暗に形成しており、そうした厳しさは時折表情にもあらわれてしまう。こうした増田の無邪気な二面性は、工場法に反対する資本家たちが弄する二枚舌めいた言辞の、ある種のパロディであると読むことができる。また、事（工場法の立案／新聞からの攻撃）が起きたのちに後出しで弁明するという姿勢からも、彼が工場法に反対する世の資本家たちの、一種のパロディ的な人物として造型されているさまが見てとれる。そうした読解を行ったうえで、如上のような諷刺的な作風をもつ本作を、〈創作的批評〉のゼロ・ポイントとして、作家史のなかに新たに位置づけなおした。

第五章では、小説「蛇」（『中央公論』明治四四・一）について、国民道徳論の中心的理念である家族国家観という観点から論じた。「忠孝一致・祖孫一体」をスローガンとする家族国家観は、天皇・皇后を親、臣民を子として、国家を一つの〈家〉として捉え、子は親に孝を尽くすべきである、というものであるが、大逆事件下の生政治においては、親に逆らう子を罰する、という体罰＝処罰の論理へと反転する。本作はこうした「反転した家族国家観」を表象しつつ、そうした国家レベルでの関係が、実際の家族のレベルにおいては成立不可能であるという点を捉えており、国家と家族とを類推的に捉えることの不可能性をあぶり出している。しかし一方で、語り手「己」が説く暴力論については、作中で明確に相対化されることはなく、本作もまた、国家の生政治の圏域を脱し切れておらず、そこに端的な限界が認められる、と結論づけた。

第六章では、第五章では取り上げきれなかった〈新しい女／婦人〉というトピックについて、対話文「さへづり」（『三越』明治四四・三）・「なのりそ」（『三田文学』明治四四・八～九）を通じて、再度考察した。「さへづり」は、掲載誌の読者を意識したのであろう、当時の最新流行の服飾文化などを取り上げつつも、後半ではイギリスの婦人参政権運動について言及がなされるという、ややねじれたテキストとなっている。諸先行論の争点も、そうした分裂したモチーフのいずれに力点を置いて読むかといった点にあり、現実の政治運動をどうまなざしているのかについては、現在でも評価が定まっているとは言えない。それをふまえ本稿では、そうした服飾文化に関する記述のなかで言挙げされる「賈物」（紛い物の宝石）という語を手がかりとして、婦人参政権運動についての記述を再検討した。ヨーロッパのモードについて語る百合子は、ロンドンで見てきた婦人参政権運動の集会を、「なんだか少し滑稽染みてゐる」と語る。彼女はどこかで読んだバーナード・ショーの一幕物（集会を戯画化したもの）を通じて現実の運動をまなざしており、ある意味において、現実と虚構を区別していないとも言える。紛い物の宝石を身につけることが良いとも悪いとも言わない百合子にとっては、運動という現実か、戯画化された虚構（＝「賈物」）かは、

さして重要な問題ではない。そうした彼女の語りが支配的である本作は、〈新しい女／婦人〉というトピックに、未だ深く切り込めてはいない。一方で「なのりそ」は、〈新しい女／婦人〉の主体性をめぐって、あるクリティカル（危険／批評的）な一面を暗示している。作中で一計を企む歌子は、「冒険」心を称揚する威勢のよい語りから、従来〈新しい女〉としてコード化されてきた。一方でそれに対する広前は、「観望」も時には必要、と無用に事を荒立てない、保守的な人物として造型されている、とひとまず言うことができるだろう。こうした歌子・革新／広前・保守といった図式は、しかし、大逆事件の顛末を通して見たとき、歌子の「冒険」心こそが、国家の性急な処置であり、広前の「観望」こそが、もう一つのあり得たかもしれない結末である、という反転した構図を浮かび上がらせる。ゆえに歌子の「冒険」心には、大逆事件をめぐる国家の暴力の論理に与してしまう側面が含み込まれてしまっており、彼女を諫める役割としての広前を対置する本作は、従来言われてきたものとは異なる意味での、〈新しい女〉への擁護であり、批判でもある、と結論づけた。

第七章では、長篇小説『青年』（『スバル』明治四三・三～四四・八）を取り上げた。文学・思想の取り締まり、家族国家観、社会主義など、これまで取り上げてきたものと同種のトピックが共有されていることを確認しつつ、そうした諸トピックを包括する物語として、つまり「〈創作的批評〉としての『青年』」を論じることを試みた。主人公・小泉純一が文学者として修養を積もうとするも、確たる実感が得られず、とうとう何も書かないというプロットからは、彼が新思想などに安易に染まらず、常にそれを相対化する能力を有しているさまが見て取れる。そうした相対化は、モデル問題ばかりが取り沙汰され、肝心の作品そのものが評されず、その結果当局にも足下をすくわれかねない、という文壇の猖獗を極めた状況に対して、純一が当初模範にしようとしていた自然主義文学に追従しない、という選択肢をとることに結実し、そこにかかる状況へのプロテストが認められる、と結論づけた。

第八章では、最後の〈創作的批評〉ともいえる「かのやうに」（『中央公論』明治四五・一）について、当時の歴史学の方法論であった、純正史学／応用史学という観点から考察を加えた。主人公である若き歴史学者・五条秀麿は、己が国史をなすにおいて、「神話と歴史との限界をはっきりさせる」ために、ハンス・ファイヒンガーの『かのやうにの哲学』（*Die Philosophie des Als Ob*, 1911）からそのヒントを得る。それを以て彼は現在の困難な状況（南北朝正閏論争などに見える国体論的な歴史観の支配）を突破しようとする。しかし同時代のコンテクストを概観すれば、秀麿がファイヒンガーを見出す以前から、〈かのやうに〉という論法は実は、応用史学という方法論（＝国体論的な歴史観）として、すでに発動していた。そうした国家的な修正主義を反復しようとする秀麿の論理は、作中で名指されるように、まさに「怪物」であり、それを友人の綾小路が否認するという叙述に、国家的な修正主義に対する批評性が存する、と結論づけた。

以上の各論をふまえて、終章では改めて、〈創作的批評〉とは一体どのようなものであったのかについて、一考を加えた。「〈創作的批評〉というダイアログ」は「現実のダイアログ——組織的実践・議論・論争など——の一種のシミュレーションである」、と第三章の末尾で述べたことをふまえ、「詩人（作者）の仕事は、すでに起こったことを語ることではなく、起こりうることを、すなわち、ありそうな仕方、あるいは必然的な仕方でも起こ

る可能性のあることを、語ることである」(アリストテレス)、という言をもって、ひとまずの結論に代えた。〈創作的批評〉は確かに、「起こりうること」、「ありそうな仕方、あるいは必然的な仕方でおこる可能性のあること」を語っている。ただし、それは常にすでに〈散種〉(ジャック・デリダ)しており、鷗外という「主体の意図」に、必ずしも沿っているわけではない。ゆえに本稿での試みは、「自己へと回収しえない他者の、また一者へと結集しえない多者の、言語における経験」(高橋哲哉)なのである。

今後の展望として、本稿で取り上げられなかった鷗外の諸作品と、彼の(批判的)継承者とも言うべき永井荷風についても言及した。明治四〇年代、鷗外とは別の仕方でお創作的な〈批評〉(あるいは〈批評〉的な〈創作〉)を試みていた荷風については、別稿を期するところである。

巻末には附録として「明治後期・〈社会主義〉に関する言説の書誌目録(単行本・雑誌記事の部)」を付した。無論氷山の一角にすぎず、今後継続して調査を進める所存である。

主な引用文献・参考文献

- ・労働運動史研究会編『明治社会主義史料集』(全二〇冊、明治文献資料刊行会、一九六〇・一〇～六三・一二)
- ・荒畑寒村監修・太田雅夫編『明治社会主義資料叢書』(全八巻、新泉社、一九七二・一二～七三・八)
- ・森山重雄『大逆事件＝文学作家論』(三一書房、一九八〇・三)
- ・小泉浩一郎『森鷗外論 実証と批評』(明治書院、一九八一・九)
- ・中村文雄『大逆事件と知識人』(三一書房、一九八一・一二)
- ・竹盛天雄『鷗外 その紋様』(小沢書店、一九八四・七)
- ・和田利夫『明治文芸院始末記』(筑摩書房、一九八九・一二)
- ・中村幸雄『森鷗外と明治国家』(三一書房、一九九二・一二)
- ・大塚美保「秀麿・秋水・ハルナック——『かのやうに』論補完のために」(『鷗外』第八〇号、二〇〇七・一)
- ・渡辺善雄『鷗外・闘う啓蒙家』(新典社、二〇〇七・二)
- ・大塚美保「国家を批判し、国家を支える——鷗外「秀麿もの」論」(『文学』第八巻第二号、二〇〇七・三)
- ・南明日香『永井荷風のニューヨーク・パリ・東京——造景の言葉』(翰林書房、二〇〇七・六)
- ・大塚美保「森鷗外と大逆事件——彼の知り得た情報、および見解発信のあり方に関する覚え書き——」(『聖心女子大学論叢』第一一〇集、二〇〇八・二)
- ・中村文雄『大逆事件と知識人——無罪の構図』(論創社、二〇〇九・四)
- ・ジャック・デリダ『散種』(藤本一勇ほか訳、法政大学出版局、二〇一三・二)
- ・高橋哲哉『デリダ——脱構築と正義』(講談社〔講談社学術文庫〕、二〇一五・五)